



日本近代文学名作鉴赏

外研社

上海外语教育出版社

图书在版编目 (CIP) 数据

日本近代文学名作鉴赏 / 谭晶华编著. —上海:

上海外语教育出版社, 2003

ISBN 7-81080-719-6

I 日... II 谭... III 近代文学-文学欣赏-日本

IV. I 313. 064

中国版本图书馆CIP数据核字 (2002) 第104172号

出版发行: **上海外语教育出版社**

(上海外国语大学内) 邮编 200083

电 话 021-65425300 (总机)

电子邮箱 bookinfo@slep.com.cn

网 址 <http://www.slep.com.cn> <http://www.slep.com>

责任编辑: 赵丽君

---

印 刷: 常熟市华顺印刷有限公司

经 销: 新华书店上海发行所

开 本: 850×1168 1/32 印张 15.5 字数 415 千字

版 次: 2003年5月第1版 2005年2月第2次印刷

印 数: 5 000 册

---

书 号: ISBN 7-81080-719-6 / I · 073

定 价: 19.80 元

本版图书如有印装质量问题,可向本社调换

## 前 言

日本,中国一衣带水的友好邻邦;日本文学,世界文化园艺中的瑰丽奇葩。从她的古典文学名著《源氏物语》到当代诺贝尔文学奖获得者川端康成的《雪国》,源远流长。群星灿烂的日本文学曾对包括中国在内的世界各国的文学发展产生过不同程度的影响,而其中从明治时代到昭和时代以来的日本近现代文学,又是日本文学发展史上一段熠熠生辉的珠链。在大量的日本近现代小说中最杰出的必读作品是哪些?怎样从文学发展史的角度看待日本文学家的丰富多彩的创作活动?如何品评日本近现代文学中众多的文学流派?对日本近代名著何以给予实事求是的评价?这些问题正是广大读者迫切需要了解、日本文学研究者应当给以正确解答的。本书编著者基于上述思考,不惮冒昧,从日本近现代文学名家名作中遴选出能够代表并覆盖整个日本近现代文学史的部分作品,采用鸟瞰与显微相结合的方法,既介绍作品作家,又评点作品中精彩、重要的原文章节,以简洁的文字进行述评式的评介与赏析,以期勾勒出日本近现代文学史的大致轮廓,使读者对日本近现代文学发展有一个全景性的了解。

使人感到欣慰的是,这一尝试得到了大连外国语学院《日语知识》、商务印书馆和上海外语教育出版社编辑的赞同。1985年至1987年的三年间,这些鉴赏性的文章曾先后在《日语知识》上连载,引起了读者的关注。本书便是在这些连载文章的基础上修改提高、增加若干篇目、加入原文和点评,合成这小小的一札,带着编

辑、同仁们的心血奉献给读者

本书1992年初版时有60篇,此次再版新增20篇,共计80篇,按发表年月排列。每篇文章均由如下三个部分构成:作品梗概、鉴赏评述(包括引用原作精彩、重要的章节,添加适当注释并作扼要的赏析性说明)、作者简介。这样做,旨在使读者了解作家作品之后,借助于注释和提示能亲口品尝到原作原文的风味,因此,本作品的阅读对象是学习日本近现代文学史的日本语言文学专业的高年级学生、从事这一专业教学的有关教师及有一定日语基础的日本文学爱好者。

编著者在完成此书时曾参考了下列著作:《日本的名作》(小田切进著)、《近代日本文学史》(三好行雄等著)、《现代日本文学史》(吉田精一著)、《日本名作事典》(小田切进监修)、《日本文学鉴赏辞典——近代编》(吉田精一编)、《日本近代文学大事典》(日本近代文学馆编)以及中、日两国专家们的其他著作和研究成果,在此谨致谢忱。

日本文学是一片深广的海洋,对这片海洋中一掬浪花、一串珠玑的采撷和鉴赏,编著者限于学力曾经颇费斟酌。好在有众多前辈和同行的不吝赐教,本书就权当做引凤之箫吧。

谭晶华

2002年9月于上海外国语大学

## 日本近代文学名作鉴赏

谭晶华 编著

# 目 录

- (1) 浮云(浮雲) ..... 二叶亭四迷
- (8) 舞姬(舞姫) ..... 森鸥外
- (14) 五重塔(五重塔) ..... 幸田露伴
- (20) 青梅竹马(たけくらべ) ..... 樋口一叶
- (26) 金色夜叉(金色夜叉) ..... 尾崎红叶
- (32) 不如归(不如帰) ..... 徳富芦花
- (38) 高野山圣僧(高野聖) ..... 泉镜花
- (44) 少年的悲哀(少年の悲哀) ..... 国木田独步
- (50) 破戒(破戒) ..... 島崎藤村
- (56) 哥儿(坊っちゃん) ..... 夏目漱石
- (62) 向何处去(何処へ) ..... 正宗白鸟
- (68) 乡村教师(田舎教師) ..... 田山花袋

- (74) 土地(土) ..... 长塚节
- (80) 文身(刺青) ..... 谷崎润一郎
- (86) 雁(雁) ..... 森鸥外
- (92) 心(心) ..... 夏目漱石
- (97) 罗生门(羅生門) ..... 芥川龙之介
- (103) 湿江抽斋(洪江抽齋) ..... 森鸥外
- (109) 明暗(明暗) ..... 夏目漱石
- (115) 各显神通(又译《较量》)(腕くらべ) ..... 永井荷风
- (121) 在城崎(城の崎にて) ..... 志贺直哉
- (127) 神经病时代(神経病時代) ..... 广津和郎
- (133) 拖带孩子(子をつれて) ..... 葛西善藏
- (139) 诞生的苦恼(生まれ出づる悩み) ..... 有岛武郎
- (146) 地狱变(地獄変) ..... 芥川龙之介
- (153) 田園的忧郁(田園の憂鬱) ..... 佐藤春夫
- (159) 一个女人(又译《叶子》)(ある女) ..... 有岛武郎
- (165) 友情(友情) ..... 武者小路实笃
- (171) 珍珠夫人(真珠夫人) ..... 菊池寛
- (176) 海神丸(海神丸) ..... 野上弥生子
- (182) 心理测验(心理試験) ..... 江戸川乱歩
- (187) 大菩萨岭(大菩薩峠) ..... 中里介山
- (193) 柠檬(檸檬) ..... 梶井基次郎

- (199) 竹泽先生(竹沢先生という人) ..... 长与善郎
- (205) 伊豆的舞女(伊豆の踊り子) ..... 川端康成
- (212) 伸子(伸子) ..... 宫本百合子
- (218) 生活在海洋上的人们(海に生くる人人) ..... 叶山嘉树
- (224) 盘旋的鸦群(渦巻ける烏の群) ..... 黑岛传治
- (230) 蟹工船(蟹工船) ..... 小林多喜二
- (236) 流浪记(放浪記) ..... 林芙美子
- (242) “悠闲”眼镜(暢気眼鏡) ..... 尾崎一雄
- (248) 春琴传(春琴抄) ..... 谷崎润一郎
- (255) 人生剧场(人生劇場) ..... 尾崎士郎
- (261) 家徽(紋章) ..... 横光利一
- (267) 苍生(蒼氓) ..... 石川达三
- (273) 黎明前(夜明け前) ..... 岛崎藤村
- (279) 生命的初夜(いのちの初夜) ..... 北条民雄
- (285) 直奔真实(真実一路) ..... 山本有三
- (291) 善贤菩萨(普賢) ..... 石川淳
- (297) 冬季的栖身处(冬の宿) ..... 阿部知二
- (303) 暗夜行路(暗夜行路) ..... 志贺直哉
- (310) 濠东趣谭(濠東綺譚) ..... 永井荷风
- (316) 雪国(雪国) ..... 川端康成
- (322) 年轻人(若い人) ..... 石坂洋次郎

- (328) 铁石心肠(木石)<sup>ほくせき</sup> …………… 舟桥圣一
- (334) 与和歌的诀别(歌のわかれ)<sup>うた</sup> …………… 中野重治
- (340) 在什么样的星长下(如何なる星の下に)<sup>いかなるほしのもと</sup> …………… 高见顺
- (346) 菜穗子(菜穗子)<sup>な おこ</sup> …………… 堀辰雄
- (352) 缩影(缩影)<sup>しゆくず</sup> …………… 德田秋声
- (358) 细雪(细雪)<sup>ささめゆき</sup> …………… 谷崎润一郎
- (364) 李陵(李陵)<sup>りりょう</sup> …………… 中岛敦
- (370) 在圣约翰医院(圣ヨハネ病院にて)<sup>せい びょういん</sup> …………… 上林晓
- (376) 白痴(白痴)<sup>はくち</sup> …………… 坂口安吾
- (382) 阴郁的画(暗い絵)<sup>くら え</sup> …………… 野间宏
- (388) 俘虏记(俘虏記)<sup>ふりよき</sup> …………… 大冈升平
- (394) 丧失为人资格(人間失格)<sup>にんげんしつかく</sup> …………… 太宰治
- (400) 讨人嫌的年龄(厭がらせの年齢)<sup>いや ねんれい</sup> …………… 丹羽文雄
- (406) 夏天的花(夏の花)<sup>なつ はな</sup> …………… 原民喜
- (412) 遥拜队长(遥拝隊長)<sup>ようはいたいちよう</sup> …………… 井伏鱒二
- (418) 二十四只眼睛(二十四の瞳)<sup>にじゅうよん ひとみ</sup> …………… 壺井栄
- (424) 火鸟(火の鳥)<sup>ひ とり</sup> …………… 伊藤整
- (430) 金阁寺(金閣寺)<sup>きんかくじ</sup> …………… 三島由纪夫
- (436) 天平之薨(天平の薨)<sup>てんぴやう いらか</sup> …………… 井上靖
- (442) 死者的奢华(死者の奢り)<sup>ししゃ おご</sup> …………… 大江健三郎
- (448) 恐慌(パニック) …………… 开高健

- (454) 海与毒药(海と毒薬) ..... 远藤周作
- (460) 点与线(点と線) ..... 松本清张
- (466) 砂女(砂の女) ..... 安部公房
- (472) 越前竹偶(越前竹人形) ..... 水上勉
- (478) 挪威的森林(ノルウェイの森) ..... 村上春树



# 浮云

浮雲  
(浮雲)

● 二叶亭四迷

## 作品梗概

主人公内海文三出身在静冈县的旧武士家庭，他告别了乡下的老母，独自一人来到东京，寄宿在叔父园田孙兵卫家。完成学业之后，在机关里当上了一名小官吏。文三的叔父经常外出经商，家里只有婶母阿政和两个孩子（一个寄宿学校）。阿政是孙兵卫的后妻，一个典型的功利主义者、势利小人，开始她觉得文三颇有出息，意将比文三小5岁的女儿阿势许给文三。阿势长得很俊俏，自幼是母亲的掌上明珠，长大后成了一个骄纵任性的姑娘，她受到当时所谓的“文明开化”的社会风气的影响，接受了明治初期的资本主义新时代的教育，洋气十足。她靠着天生的小聪明，看上去学、艺兼优，实际上却很浅薄，并不很看重为人正直的文三。文三爱上了阿势，但始终没有勇气向她表明自己的爱慕之心，心情很抑郁。

两年后，机关进行行政改革时，生来不擅溜须拍马、巴结上司的文三被免职了。阿政对文三的态度顿时一落千丈。文三被免职的第二天，她口出污言，骂了文三，以后经常指桑骂槐。阿势当时虽然为

文三辩护了几句,但很快和文三的同僚本田升亲热起来。本田升是老于世故、擅于蝇营狗苟的人,行政改革中非但没被免职,反倒官升一级,当上了科长。11月2日那天,本田邀请阿政一家去团子坂观菊,阿势居然欣然前往,这使文三苦恼万分。

这以后,本田与阿政母女的来往日益亲密,对文三则竭尽嘲弄之能事。阿势劝文三去求本田为其复职出一臂之力,然而,文三根本不愿与只知对上级献媚求宠的庸俗之辈本田一谈。为此,文三和阿势发生了争吵,他觉得自己在这园田家已经无法住下去,便决定对阿势进行一次忠告,然后坚决离开她家。

## 作品鉴赏

《浮云》发表于1887年,是日本近代文学史上的第一部杰出的长篇小说,共由三编组成。因为当时作者还是无名文学青年,所以第一、第二编是以坪内逍遥的名义发表的。

作品成功地塑造了四个栩栩如生、呼之欲出的人物形象。如果我们把阿政的功利主义看做是封建时代的旧思想的代表,而把文三鄙视虚伪、憎恶谄媚看做是资本主义初期的新思想的代表,那么,本田就是一个貌似具有新思想、实为地道的旧思想的卫道士,而阿势正是游弋在这几者之间的一朵浮云。作品通过明治初期的一个小人物文三丢了工作、失去恋人,小小的愿望被无情粉碎后成为社会上多余的人的遭遇,反映了明治初期日本知识分子的苦恼,揭露了明治时代官场的黑暗和世态的炎凉,批判了当时社会中单纯模仿西方社会的种种浅薄的所谓“文明开化”的现象。日本文学界高度评价这部名垂于文学史的现实主义杰作。中村光夫等人编写的《近代日本文学史》中说:“文体采用日本最

早出現の清新的言文一致体、并熟练地运用从俄国小说里学来的现实主义手法、准确地、写实性地描写了近代社会及其人物。”这部小说给以后的日本文学的创作和近代文学的发展以极大的影响，从而使作者成为日本近代文学的先驱者之一。

### 逸文一<sup>①</sup>

「ですがネ、教育きょういくのない者ものばかりを責めるわけにもいきませんヨネー。私わたくしの朋友ほうゆうなんぞは、教育きょういくのあると言いうほどありやアしませんがネ、それでもマア普通ふつうの教育きょういくは享うけているんですよ、それでいてあなた、西洋せいよう主義しゆぎのわかるものは、二十五人うちの内うちにたった四人よつたりしかないの。その四人よつたりもネ、塾じゆくにいるうちだけで、ほかへ出でてからはネ、口くちほどにもなく両親りょうしんに压制あつせいせられて、みんなお嫁よめに往いったりお婿むこを取とったりしてしまいましたの。だから今いままでこんなことを言いってるものは私わたくしばかりだとおもうと、なんだか心こころ細ほそくって心こころ細ほそくってなりません。でしたがネ、このごろはあなたという親友しんゆうができたから、アノー大變氣たいへんきじょう丈夫ぶ②になりましたわ(略)。それでも私わたくしにはあなたはよくわかっているつもりですよ。あなたの学識がくしきがあつて、品行ひんこうが方正ほうせいで、親おやに孝こう行こうで…」

「だからあなたには私わたくしがわからないというのです。あなたは私わたくしを親おやに孝行こうこうだとおっしゃるけれども、孝行こうこう

じゃアありません。私わたくしには…親おやより…大切たいせつな者ものが  
あります…」ト吃どもりながら④言いって文三ぶんぞうは差さし俯うつむ向むい④てし  
まう。お勢せいは不思議ふしぎそうに文三ぶんぞうの容よう子すを眺ながめながら

「親おやより大切たいせつな者もの…親おやより…大切たいせつな…者もの…親おやより大  
切たいな者せつは私わたくしにもありますワ」

文三ぶんぞうはうな垂たれた頸くびを振あり揚あげて⑤

「エ、あなたにもありますと」

「ハアありますワ」

「誰だ…誰だれが」

「人ひとじゃないの、アノ真理しんり」

「真理しんり」

ト文三ぶんぞうは慄ふる然ふると胸どう震ふるいをして⑥唇くちびるを喰くいしめた⑦

まましばらく無だんまり言まり(略)

## 选文注释

①本段引自《浮云》第三章“异常奇特的初恋(下)”。仲夏之夜，文三散步回来，阿政外出未归，只有阿势在家。阿势主动邀请文三进屋闲聊解闷，言谈中她若无其事地告诉文三，母亲说，你和文哥要好，不如趁早结婚。文三听后心旌飘摇，很想就势道出对阿势的爱情，但又不敢启齿。这个场面生动地描写了文三的忠厚、诚恳和阿势的轻浮、浅薄。②大变气丈夫：有了主心骨，很有信心。

- ③吃りながら: 结结巴巴地。 ④差し俯向く: 低下头去。 ⑤つな垂れた頸を振り揚げて: 抬起低垂的头。 ⑥慄然と胴震いをする: 浑身颤抖。 ⑦唇を喰いしめる: 咬紧嘴唇。

逸文 二①

お勢母子の者の出向いた後、文三は漸く些し沈着  
 つくねん つくえ ほとり うづくま ままうで く あご えり  
 て、徒然と机の辺に蹲踞った儘、腕を拱み頸を襟に  
 うず おうのう ものおも しず  
 埋めて懊惱たる物思いに沈んだ。

どうも氣に懸る、お勢の事が氣に懸る。こんな区々  
 こと こと き かか せい こと き かか くく  
 たる事は苦にやむだけが損だ損だと思ひながら、ツイ  
 どうも氣に懸ってならぬ。

凡そ相愛する二ツの心は、一体分身<sup>②</sup>孤立する者で  
 およ あいあい ふた こころ いったいぶんしん かりつ もの  
 もなく、又仕ようとて出来るものでもない故に、一方の  
 こころ よろこ とき かたかた こころ とも よろこ かたかた こころ  
 心が歡ぶ時には他方の心も共に歡び、一方の心  
 かな またし で き ゆえ かたかた  
 が悲しむ時には他方の心も共に悲しみ、一方の心が  
 たの とき かたかた こころ とも かな かたかた こころ  
 楽しむ時には他方の心も共に楽しみ、一方の心が苦  
 しむ時には他方の心も共に苦しみ、嬉笑にも相感じ  
 どば あいかん ゆかいてきえつ ふ へいほんちん あいかん き  
 怒罵にも相感じ、愉快適悦<sup>③</sup>、不平煩悶にも相感じ、氣  
 が氣に通じ心が心を喚起し決して齟齬し杆格する<sup>④</sup>  
 きの つう こころ こころ よびおこ けつ せご かんかく  
 者で無いと今日が日まで<sup>⑤</sup>文三は思っていたに<sup>⑥</sup>、今文  
 せう つうよう せい かん どう  
 三の痛痒をお勢の感ぜぬは如何したものだろう。

どうも氣が知れぬ、文三には平氣で澄ましているお  
 せい こころ い き のみ こ  
 勢の心意氣が呑込めぬ。

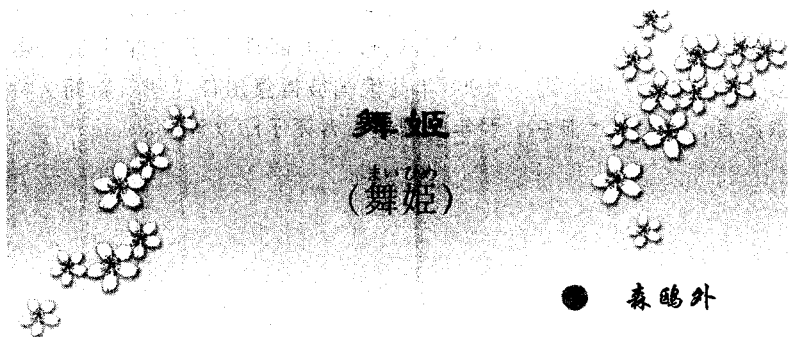
## 选文注释

①本段引自《浮云》第八章“团子坂赏菊(下)”。阿政、阿势和本田升去团子坂赏菊后,文三独自左思右想,揣测阿势的心情,异常烦恼。文三虽然受到邀请,但是失业后心境不佳,所以没有同行。他从阿势的眼神和动作上确信她是爱着自己的,但却不为自己分忧,竟毫不在乎地和自己憎恨的本田一起外出赏菊。这使文三切实感到了她的冷淡和不可捉摸。像这样深入细致地描写人物内心活动的手法,正是《浮云》的新鲜之处。文章中除了“今日が日”和“思っていたに”等二三处文语外,均为口语体,读来明快流畅。②一体分身:指相爱的人应两个身躯一条心。③適悦:心满意足。④齟齬し杆格する:齟齬杆格,相互不容、冲突。⑤今日が日まで:文语残余,相当于“今日まで”。⑥に:文语接续助词,表示后项的事实与前项的预想结果完全相反,即表示逆接,相当于现代语中“のに”或“けれども”之意。

## 作者简介

ふたばていしめい(1864—1909)原名长谷川辰之助。明治时代的小说家和翻译家。他很早提出“小说家的职责是要道出人生的真谛”的主张,在文学反映现实、反映时代精神、指导读者认识人生、认识社会方面作出了可贵的努力。二叶亭四迷这一笔名是“你给我死掉算了”一语的谐音,表明作者对当时社会现实的怀

疑、不满和愤慨。他的主要作品还有文艺评论《小说总论》、小说《面影》和《平凡》等，并有用现代口语翻译的屠格涅夫的《幽会》、《邂逅》等小说。1908年赴俄国彼得堡出任《朝日新闻》特派记者，不幸染上肺病，翌年回国途中客死于印度洋上。



### 作品梗概

主人公太田丰太郎早年丧父，全靠母亲扶养成成人。他聪明伶俐自幼受到严格的家教，成绩优异，被誉为天才。从东京大学毕业后丰太郎成了政府机关的一名官员。正当他兢兢业业地干工作时，上级派他去德国留学深造。丰太郎来到光怪陆离、眼花缭乱的欧洲大都市柏林一边学法律一边钻研艺术。他怀着模糊的功名心，一开始曾暗暗发誓：“无论身处怎样的花花世界，我的心决不为之所动。”然而，转眼三年过去了，他接触到西方资本主义社会中的“自由”的空气，开始对迄今为止在日本的生活进行反省，并意识到潜藏在内心深处“真我”好似在反抗往日那个虚伪的旧我。他把这种感受写成文章，寄回国内发表。以后便自感逐渐具备了“独立的思想”。有一次，丰太郎在一座旧教堂前，见一十六七岁的美丽少女正在哭泣，询问后得知，这个名叫爱丽丝的舞女的父亲刚死，无钱安葬，她向剧场老板借，没想到老板乘人之危竟对姑娘不怀好意。丰太郎出于同情，把自己的怀表连同口袋里仅有的二三个马克一起给了爱丽丝。从此，两